

今週の為替相場見通し(2021年3月22日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		108.61 ~ 109.36	108.88	108.00 ~ 109.50
ユーロ	(ドル)		1.1874 ~ 1.1989	1.1906	1.1800 ~ 1.2150
(1ユーロ=)	(円)		129.33 ~ 130.66	129.64	128.00 ~ 131.00
英ポンド	(ドル)		1.3809 ~ 1.4001	1.3859	1.3750 ~ 1.3950
(1英ポンド=)	(円)	*	150.57 ~ 152.55	150.96	149.50 ~ 152.00
豪ドル	(ドル)		0.7700 ~ 0.7849	0.7745	0.7620 ~ 0.7850
(1豪ドル=)	(円)	*	84.12 ~ 85.45	84.29	83.15 ~ 85.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 小林 元子

(1) 今週の予想レンジ: 108.00 ~ 109.50 円

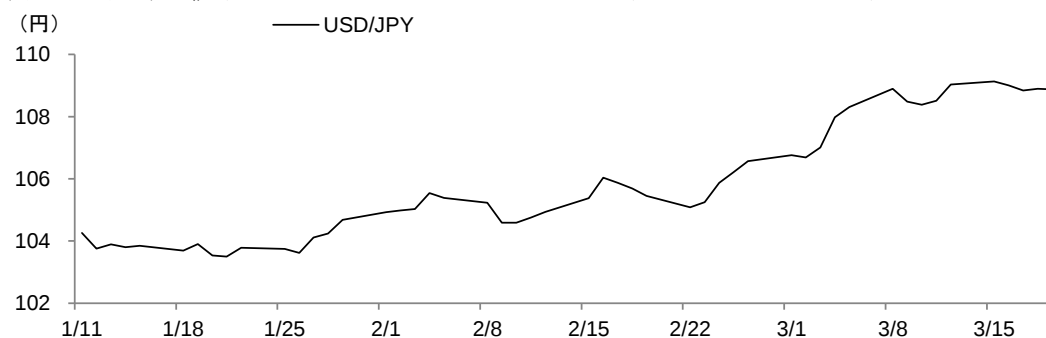
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は年初来高値を更新する展開。週初15日、109円台前半でオープンしたドル/円は、米金利上昇を受けたドル買いを背景に一時的年初来高値となる109.36円まで上昇したが、その後特段材料難な中、米金利上昇が落ち着くと109円台前半で方向感に欠ける値動き。16日は、米2月小売売上高が市場予想を大きく下回ると米2月鉱工業生産の悪化もあいまって、ドル/円は108円台後半まで下落した。その後は米金利が上昇に転じ、ドル/円は109円台前半まで回復した。17日、注目されたFOMCでは、市場予想通り政策金利は据え置きとなるも、金利見通しは市場予想よりハト派な結果となり米金利が低下し、パウエルFRB議長もハト派な姿勢を示したことも一段と下げ幅を拡大し、ドル/円は108円台後半まで値を下げた。18日は、日銀金融政策決定会合において、長期金利の変動幅の拡大を決定するとの報道に、ドル/円は108.62円まで下落。その後、ドル/円は109円台前半まで上昇したが、米経済指標の弱い結果を受けて108円台後半まで下落した。週末19日は、東京時間午後に日銀金融政策決定会合にて、長期金利の変動幅拡大やETF買い入れ方針が変更されると、ドル円は109.14円まで上昇したが、その後は米金利が下落する動きを受けたドル売りに一時週安値となる108.61円まで下落。米国時間にてFedが補完的レバレッジ比率の緩和延長をしないことを発表し、米金利が上昇する動きを受けたドル買いに109.00円まで戻す展開となり、その後は109円を挟んで売り買いが交錯したが、週末を控え狭いレンジでの推移が続き108.88円で越週した。

今週のドル/円相場は引き続き底堅い推移を予想する。先週日銀により10年債利回りの変動幅を±0.25%程度に拡大する変更が発表されたことを受けて一時的に円高進行が見られた。対して米国FRBは政策金利の誘導目標レンジを据え置き、2023年まで実質ゼロ金利を維持する方針を変更しないと発表されている。しかしながら近日の米国債利回りは大幅な上昇を見せており、高官らによる金利高抑制発言もないこと、米国における経済指標の堅調予測により、ドル/円は引き続き底堅く推移すると予想。また、今秋はパウエル議長が公の場での発言が3回予定されており、FOMCが終了したばかりでビューは変わらないと予想されるが、発言内容は注目される。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/15~3/19)の値動き: 安値 108.61 円 高値 109.36 円 終値 108.88 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 1.1800 ~ 1.2150 128.00 ~ 131.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ相場は、週後半に上昇するも週末にかけて再び弱含む展開。15日、1.19台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、英製薬会社で製造するワクチンにおいて副作用が報告され、欧州での使用が一時見合わせとなったことが懸念され、1.19台前半で上値重く推移。ユーロ/円については、ドル/円が109円前半で底堅い動きなる中で、130円前半での小幅上下に終始。翌16日は独3月ZEW景況感指数が市場予想を上回ったこともありユーロ買いが先行しユーロ/ドルは1.1952まで上昇するも、その後はワクチン接種見送りの動きに依然上値重く、一時1.1882まで下落。ユーロ/円も130.40円近辺まで上昇後、129円半ばへと反落。17日のFOMCにおいては、市場予想よりもややハト派な結果にドル売りが強まり、ユーロ/ドルは1.19台後半まで上昇。その後パウエルFRB議長が景気見通しに依然慎重な見方を示し、現行金融緩和継続の必要性を改めて示唆したことでドル売り地合いが継続し18日にかけてユーロ/ドルは週高値となる1.1989まで上昇し、ユーロ/円も一時週高値となる130.66円まで上伸。ただし、その後は米金利が再度上昇を背景としたドル買い戻しの動きにユーロ/ドルは1.19台前半まで、ユーロ/円も129円半ばまで下落した。19日は欧州での新型コロナ再拡大に対する懸念、またFRBがSLRの緩和措置を3月末以降延長しないとの報道に米金利が上げ幅広げる中でドル買いが強まりユーロ/ドルは一時週安値となる1.1874まで下落。ただその後は米金利上昇の一服を横目に1.19台を回復し、1.1906レベルでNYクローズ。ユーロ/円は、この日の日銀金融政策決定会合の結果を受け日経平均が大幅下落しドル/円も下落する展開に、一時週安値となる129.33円まで下落するも、その後は129円半ばまで持ち直し129.64円で越週。

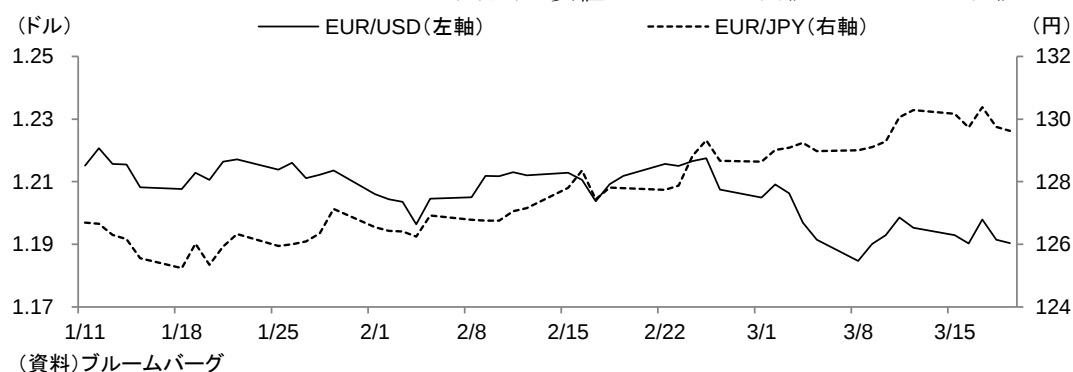
今週のユーロは上値の重い展開を予想。先週のFOMCや日銀金融政策決定会合など主要イベントを一通りこなし一服感があるも、先週末に伝わったFRBがSLRを3月末以降延長しない方針との報道に米金利が高水準で張り付いており、引き続き米金利上昇をバックとしたドル買いはサポートされ易い。他方ユーロについては、ECBが3月11日の会合において、パンデミック緊急プログラム(PEPP)の購入ペースを4-6月期に加速させる方針を示していることもあり、欧米金利差の拡大予測からユーロは弱含みを予想。また、ここきて欧州圏で急拡大する新型コロナ変異種由来の第3波パンデミックによる景気再減速懸念、および既存ワクチンの有効性と英製薬会社ワクチンの副作用をめぐる各国政府の今後のワクチン接種のかじ取りの難しさに対する不安感においてもユーロ軟調推移を予想。先週は独ZEWなど一部の経済指標改善に一時ユーロ買いで反応する場面もあったが、足元変異種拡大による再ロックダウンによって今後の経済状況に市場の関心が移行している印象で反応は限定的。もともと、足元米金利の上昇がかなり急であり、今後一時的にドル売り戻しの流れにユーロ買いが強まる場面もあるかもしれないが、直近確認された1.2000の堅さが依然意識されよう。むしろ上記のような材料を見つめればやはり素直にユーロ下落リスクに警戒したいところである。なお、今週の主な経済指標として、22日(月)ユーロ圏1月経常収支、24日(水)ユーロ圏3月PMI(速報)、ユーロ圏3月消費者信頼感指数、26日(金)独IFO3月企業景況感指数の発表などを予定している。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/15~3/19)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1874 高値 1.1989 終値 1.1906

(対円) 安値 129.33 高値 130.66 終値 129.64



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3750 ~ 1.3950 149.50 ~ 152.00 円

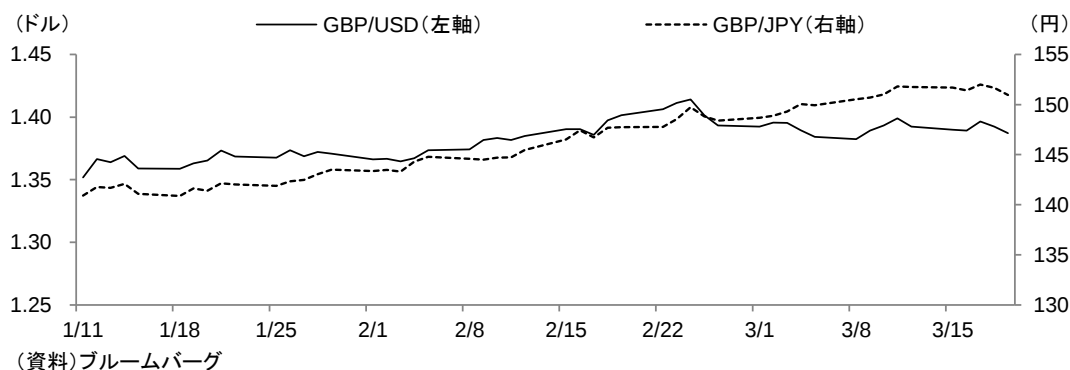
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、断続的な上下動を経て、対ドル、対円では小幅下押し、対ユーロでは概ね横這いに終わった。週明け15、16日はポンド全面安が先行したが、英本土/北アイルランド間の通商を巡るEUとの取り決め(激変緩和措置)を、英側が一方的に半年間延長(4月→10月)するとしたことで、「EU側が報復関税導入など対応策の検討に入った」との報が嫌気されたのではないかと。16日の北米勢参入後、ドルは全面安に振れたが、これは、発表された米2月小売売上高、同鉱工業生産が市場予想を大幅に下振れたことに対する素直な反応。ただ、直後、何故かユーロ/円が急落し、対円主導のユーロ全面安へと展開した。この局面は、ほんの数時間の間にポンド安→ドル安→円高→ユーロ安と相場つきが目まぐるしく入れ替わり、方向感がつかみ難かった。対照的に、17日は、米連銀公開市場委員会待ちの膠着から、ドル全面安へと、わかり易い展開を見た。同銀理事の総意(ドットチャートの中央値)として、2023年までの政策金利据え置き見通しが変わらなかったこと、パウエル議長が引き続き米長期金利上昇を看過する姿勢を示したことなどが、ドル安を誘った。ただ、その当然の帰結として、米インフレ懸念も継続、翌18日以降、週引けに掛けては、逆に米長期金利上昇を受けたドル高が支配的となった。ただ、この局面でも、何故か、円はドル以上に堅調に推移。日銀が10年国債利回りの変動幅拡大を明記したこと(18日に観測され、19日に確認された)が、或いは円買い要因と読まれたのかも知れないが、米10年国債利回りが10bp前後上昇するのと並行して、日10年国債利回りが3bp前後上昇したことが、円買い要因と読まれたとののだとしたら、なにか釈然としない思いも拭えなかった。

今週の英ポンド相場は、軟調から下押しを予想。米連銀公開市場委員会、日銀金融政策決定会合の陰でほとんど注目されなかったが、先週は英中銀金融政策委員会も開かれ、基準金利(0.50%)、資産購入額上限(8950億ポンド)をそれぞれ据え置いていた。2月中に大きく縮小し、ポンド急騰の要因視をされた米英長期金利差も、ここもとは再び高止まり(米金利>英金利)が定着、英中銀の金融政策や、英長期金利に対する通貨市場の関心はすっかり薄れてしまったかのように見える。今後も、米長期金利が上昇余地を試す流れを変える材料は乏しいものと見込むが、それを通貨市場に翻訳するなら、当面、ドルの上昇余地を見極める展開を中心にみることになるのではないかと。もうひとつ気掛かりなのは、英とEUの関係悪化の可能性。上述、北アイルランドを巡るやりとりもその一因と言えるが、この間、もうひとつ英メディアで盛んに取り上げられたのは、少なからぬEU加盟国による英製薬会社製ワクチンの使用停止。英におけるワクチン接種の目覚ましい進捗を「EU離脱の成果のひとつ」などとする一部評価に、EU側は相当鼻白んでいるとの声も聞かれるが、ただでさえ遅れているワクチン接種が、更に遅延するリスクを冒してまでも、英社製ワクチンの使用停止に踏み切るEU側の姿勢に、怨嗟とも言える、英に対する嫌悪感を読み取ることができるのではないかと。英のEU離脱派にしてみれば、もとより覚悟の犠牲かもしれないが、最も身近な隣人であり、最大の通商相手でもあるEUとの関係が、とりわけ金融同等性規制などの交渉の前に、更に悪化することがポンドに好影響を与えるとは考え難い。英経済指標は、23日(火)に英11~1月平均賃金、11~1月失業率(ILO基準)、24日(水)に英2月CPI、26日(金)に英2月小売売上高などの発表が予定されるものの、ポンドが材料視する可能性は高くはないものと見込む。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/15~3/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.3809 高値 1.4001 終値 1.3859
(対円) 安値 150.57 高値 152.55 終値 150.96



4. 豪ドル

シドニー資金室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.7620 ~ 0.7850 83.15 ~ 85.50 円

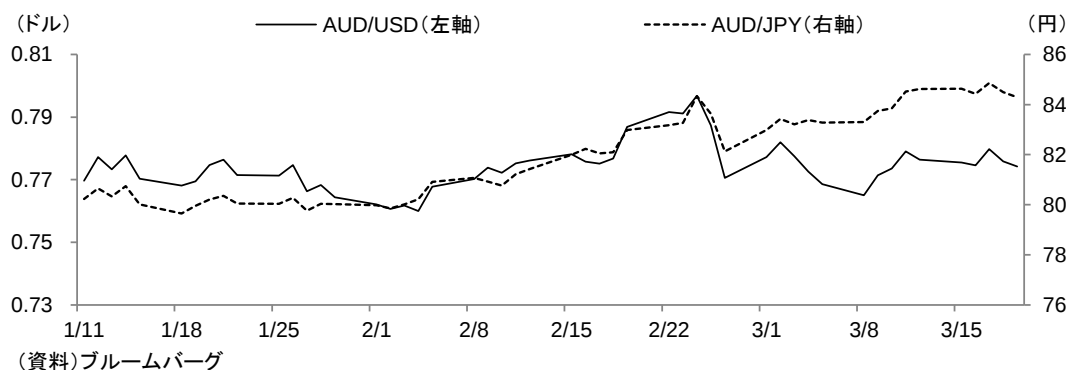
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週後半に主要イベントを控え、週前半は0.77台前半を中心に推移し、方向感の出ない展開となった。週後半は堅調な豪2月雇用統計やFOMCを主な材料に0.78台半ばまで上昇した。15日は0.77半ばから0.77前半へ戻って来い。バイデン政権が景気対策の財源を補う為、富裕層やガソリン等への増税が検討されており、これが原油価格などに重しとなり、商品通貨の豪ドルへも響いた。深刻な血栓が生じる事例が複数報告されたため、ドイツ、フランス、イタリア、スペインがアストラゼネカ製のワクチンの使用を一時的に停止すると伝わり豪ドルは0.7705近辺まで下落した。その後は0.77半ばまで戻したものの上値は重く推移。16日は材料難で再び0.77半ばから0.77前半へ行ってこい。発表されたRBA3月理事会議事要旨については「0.1%目標利回りを撤廃もしくは変更することは考慮しない」とし、YCCの買い入れの対象債券をNov'24へシフトするかは明言がなく、ノーサプライズとなった。17日はシドニー時間は0.77台前半で推移し、FOMC発表にかけて米10年債利回りが上昇すると0.77ちょうどへ向けて下落した。18日、発表されたFOMC四半期経済予測では成長率、インフレ率等が上昇修正されたものの、ドットプロットではFOMCメンバー18人のうち11人が2023年末まで金利据え置きとみており、また、パウエルFRB議長も早期利上げに否定的な見解を示した。これを受けて米株は最高値を記録、米債利回りは上げを縮小し、豪ドルは0.7810近辺まで上昇、AUD/JPYは年初来高値の85円台へのせとなった。この後発表された豪2月雇用統計は失業率5.8%(予想6.3%)、フルタイム89.1k(前回値58.7k)と堅調な改善を見せ、豪ドルは0.7836まで上昇。鉄鉱石や米株先物が上昇する局面では0.78半ばまで上昇した。しかしNY時間にかけてはFOMC後のパウエル議長の会見で長期金利への言及がなかったことが尾をひき、市場で長期金利の上昇余地があるとの見方が広がると、米債利回りは1.75%まで上昇。豪ドルは0.77半ばまで戻した。一方欧州で副作用の懸念から一時停止措置が取られていたアストラゼネカ製ワクチンは、EMA(欧州医薬品庁)が「安全で効果的」との見解を示し、欧州複数国は近く停止措置を解除する見込みとなっている。欧州のワクチン普及ペースの遅れが経済回復の遅れにつながるなどの懸念が広がっていた中では朗報となった。19日は主要イベントを通過し、一服ムード。前日の0.7850近辺までの上昇とは一転し、0.7750を挟んでの振幅となった。またNY時間にFRBが新型コロナウイルスを受けて導入していた金融機関向けの自己資本規制のレバレッジ比率(SLR)の一時的緩和措置を今月末で終了すると発表。これを受けて金融機関が自己資本比率を維持する為、保有国債を売却するのではとの見方が高まり、米債は売りが強まり、米債利回りは1.7477%まで上昇した。豪ドルは0.7718まで下落。

今週は特段材料のない月末最終週となり、一旦調整ムードとみる。但し先週のFOMCにおいてパウエルFRB議長が長期金利の上昇に警戒感を示さなかったことから、FRBはこの上昇を静観するとの見方が強まっている他、ハト派メンバー多数のドットプロットはやや保守的との見方があり、市場では2021年4Qにはテーパリング示唆が始まり、2022年上半期には実際にテーパリングが始まるのではとの予想も出てきている。今後の豪ドル水準においても大きく影響がでる為、引き続き米債金利上昇圧力に注意を払いたい。この他、現在豪NSW州では50年に一度といわれる程の豪雨に見舞われている為、洪水被害や国内でのロジスティクスサービス、新型コロナワクチンの供給などにおいて遅延障害が生じている。経済などへの影響も注視したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/15~3/19)の値動き: (対ドル) 安値 0.7700 高値 0.7849 終値 0.7745
(対円) 安値 84.12 高値 85.45 終値 84.29



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。